

## 一 般 演 題

### 1. Radioimmunoassay による tissue polypeptide antigen (TPA) 測定法の基礎的ならびに悪性甲状腺疾患における臨床的検討

佐藤 龍次 伴 良雄 (昭和大・三内)  
 真鍋 嘉尚 三村 孝 尾崎 修武  
 西川 義彦 伊藤 国彦 (伊藤医院)

腫瘍マーカーである TPA(T) の RIA キットについて、基礎的臨床的検討を行った。インキュベーション時間、温度は、説明書通りで良く、アッセイ内 C.V. は 3.4~8.9%、アッセイ間 C.V. は 5.1~10.6%、平均回収率は 93.4~105.1%、希釈試験は T の低濃度血清を用いれば 1/2 まで測定可能であった。AFP, Ferritin, CEA (C) とはほとんど交叉性はなく、血清の凍結融解および 4°C 保存では高濃度 T 程低下する傾向が大であった。正常者の T 値は 66.2±16.7 U/L で、120 以上を陽性とした。甲状腺乳頭癌の陽性率は 18.9%、濾胞癌 25.0%、未分化癌 60%、髄様癌 60%、悪性リンパ腫 42.8% で、全悪性甲状腺腫の陽性率は 22.9%、Tg の陽性率 34.4% で、良性甲状腺腫の偽陽性率は T 7.1%、Tg 65.7% であった。乳頭癌での T と Tg の相関は認められなかった。各種臓器癌での陽性率は、T 78.5%、C 39.3% と T は高率に陽性であった。結論：悪性疾患における腫瘍マーカーとしての T 測定は有用性が高いものと考えられた。

### 2. 血中フェリチン測定用キット (RIA, EIA) の比較検討

辻野大二郎 中井 仁志 千田 麗子  
 染谷 一彦 (聖マリアンナ医大・三内)  
 佐々木康人 (東邦大・放)

5種のフェリチン測定用キットの基礎的検討と正常値の比較、臨床検体での相関をみた。検討したキットは IRMA 法による RIA-gnost, SPAC, Phadebas, IMMO PHASE キット、EIA 法による FERRIZYME キットである。各キットの Within assay error は C.V. 2.5~12.3%、Between assay error は 3.8~16.6% であった。回収率は平均で Phadebas 85.5%、IMMO PHASE 78.5%、他キットで 92.4~107.4% であった。希釈試験

では一部例で原液測定で低値を示した。急性肝炎 (フェリチン値 15,725 ng/ml) で high dose hook effect の 1例を経験した (FERRIZYME)。各キットの正常値は男女差があり、男性で RIA-gnost 160±72 ng/ml, SPAC 81±37, Phadebas 108±48, IMMO PHASE 116±52, FERRIZYME 146±73 であった。臨床検体の相関は RIA-gnost との組合わせで r=0.84~0.96、他の組合わせで r=0.96~0.99 であった。測定値の高低は RIA-gnost > FERRIZYME > SPAC > Phadebas > IMMO PHASE の順であった。

### 3. 分化型甲状腺癌転移の診断における甲状腺機能低下時血清サイログロブリン値の意義

井上 豊 日下部きよ子 川崎 幸子  
 牧 正子 奈良 成子 広江 道昭  
 西岡 隆文 近藤 千里 (東医大・放)  
 栗原 重子 (同・RA)  
 藤本 吉秀 (同・内分泌外)

分化型甲状腺癌全摘後の 35 例につき、Euthyroid および Hypothyroid での血清サイログロブリン値を比較し、腫瘍マーカーとしての血清サイログロブリン値の意義について検討した。35 例を転移の有無および転移部位により 5 群に分類し、また肺および骨に転移を有する 21 例につき転移巣の大きさにより 3 群に分類し、各群と血清サイログロブリン値の関係を調べた。腫瘍の転移巣の検索には Euthyroid よりも Hypothyroid 時のサイログロブリン値のほうが敏感であり、また血清サイログロブリン値は腫瘍が大きいほど高値を示し、骨と肺両方に転移を有するものに高値の傾向が認められた。なお、7 例で甲状腺全摘後の血清サイログロブリン値を経時的に測定したが、半減期において、転移を有する 3 例で 100 時間以上、転移を有しない 4 例では約 65 時間であり、両者間で有意の差が認められた。